

●優秀賞

確かな表現力の 育成を図る 英語スピーチ学習の工夫

愛知県岡崎市立北中学校 たけい武井 しょう翔



1. 主題設定の理由

インターネットの普及に伴い、種々の情報を簡単に手に入れることができるようになった。また、ホームページ上の掲示板やブログ、Eメール等も数多く利用されるようになり、インターネット上でのコミュニケーションも広がりを見せている。コミュニケーションの手段としてのこれらの利用価値は大変高く、いながらにして世界の人々と交流を図ることもできるようになる等、私たちの生活の利便性を向上させる可能性を秘めている。

本校の生徒たちも、日常生活の中でインターネットやEメール等を利用しており、メールは、友人同士でのやり取りにも広く使われるようになってきている。連絡を取り合う手段としてだけではなく、悩み相談をする際にもメールを使っている生徒もいると聞く。このような生徒の実態を目の当たりにし、相手と接する中で、自分の思いを伝え、相手の考えを知るといった経験が希薄になってきていることへの危惧を感じる。実際に、学級で話し合う場面になると、自分の考えや思いはあるものの、なかなかそれを伝え合うことができずにいる生徒は多く、まさにこうした危惧を如実に映し出しているように思える。

本来、仲間を前にして自分の思いや考えを伝え、相手から共感や意外性を示す反応が返って

きた時には、自己理解や他者理解が促進されるものである。しかしながら、日々の生活において、自分自身の性格や行動や趣味などについて自己表現する機会は多くない。その時、英語という「外国語」を用いることで、自己表現への抵抗感が減り、取り組みやすくなるものと考えられる。そこで、英語科の授業では、学習した文法事項を効果的に活用しながら、仲間に「自己表現」する経験を数多くもたせたいと考えた。

さて、平成24年度から全面实施される新学習指導要領では、「習得」と「活用」がキーワードとして掲げられている。これまでの自分自身の授業実践を振り返ってみると、教科書本文の音読・暗唱、文型練習、書き取りテストといった、基礎的・基本的な知識・技能の習得に重点を置いた授業の比重が大きかったことに気づく。

もちろん、これらの活動があってこそ基礎的な英語力をつけることができるが、それだけでは「英語を使う楽しさ」を十分に味わうことはできない。学習した語彙や文構造を活用して、自己表現できる言語活動に取り組むとき、生徒の目の輝きは変わる。そして、既習の語彙や文構造の理解もより確かなものとなり、学ぶ意欲も高まりをみせる。

昨年度、本校1年生では、基礎的・基本的事項の理解の徹底を図り、表現力を育成するために、グループで学び合い、伝え合う場面を多く取り入れて授業を進めてきた。その中で、表現

力を育成するための手立てとして、「スピーチ」に着目して実践を進めてきた。「スピーチ」は、新学習指導要領で追加された言語活動であり、「聞く・話す・読む・書く」の4技能を総合的に育成し、表現力をつけることができるという魅力がある。このような利点を生かして、効果的に表現力の育成を図るためには、教科書の単元で学ぶ言語材料を活用しながら、軸となる表現活動（「自己紹介スピーチ」）を段階的に発展させ、学びのつながりと深まりをもたせる必要があると考えた。

そこで、系統的かつ段階的に表現活動に取り組めるように、年間を通じた、独自の単元を構想し、本研究実践を進めることにした。

2. 研究の概要

(1) めざす生徒の姿

本研究を進めるにあたって、めざす生徒の姿を「生き生きと学び合い、伝え合う姿」とした。具体的には、次のような姿の実現を図りたい。

- ・英語学習に興味をもって主体的に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能を習得する姿
- ・仲間と学び合う中で、表現する楽しさを実感し、知識・技能を活用して、意欲的に表現できる姿

(2) 研究の仮説と手立て

めざす生徒の姿を具現化するために、次のような仮説と手立てを考えた。

【仮説1】 表現活動の段階で、年間を通じて、学びの連続性や発展性があるスピーチ活動に取り組めば、英語で自己表現し、相互理解を深める楽しさや、表現することへの確かな手応えを実感しながら、「聞く・話す・読む・書く」の4技能を総合的に育成することができるであろう。

<手立て1> 自己表現の楽しさを実感しながら、4技能を総合的に育成する表現活動の工夫

- ① 基礎・基本の習得を図り、表現力の基礎を養うことを目的として、季節の行事と合わせた「英語で七夕を楽しもう」というイベント的な表現活動を単元の中に設定する。
- ② 1年間を見通して、「自己紹介スピーチ」を核とした独自の単元を構想し、「原稿を準備し、暗唱して行うスピーチ（Prepared Speech）」から「即興で話すスピーチ（Impromptu Speech）」までを、教科書で扱う言語材料に合わせて、段階的に取り組ませる。

【仮説2】 表現活動を進める中で、自らの学びを振り返り、文章で記述する「ふりかえりカード」を活用したり、学習の様子や感想を英語通信で紹介したりすることにより、生徒の表現活動に対する意欲を高めることができるであろう。

<手立て2> 生徒の学びの深まりを支える教師支援 ～個と全体への教師支援の充実～

- ① 「ふりかえりカード」に朱書きを入れ、努力を称賛したり、質問に答えたりすることによって、生徒一人一人の学びの姿の変容を見とり、学びを深めさせる。
- ② 「英語通信」で、生徒の活動の様子や英作文、感想等を紹介し、生徒の学びの姿を全体に広げ、仲間のよさや頑張りを感じ取らせ、表現活動への意欲の向上を図らせる。

(3) 抽出生徒について（生徒A）

生徒Aは、英語学習に関心を持ち、毎時間の授業を真面目に受けている。学力的には学年の中で中位に属し、日々の授業と家庭学習への地道な取り組みによって、少しずつ英語の力を伸

ばしている状態である。英語を覚えることに喜びを見出し、授業中の小テストで満点を取ると、その日の生活日記にそのことを書いてくる。その反面、覚えた英語を使って表現する場面になると、自信がもてず、消極的になってしまう面がみられたり、グループでの活動では、発表することを恥ずかしかがって早々と終えてしまったりすることもある。

本研究を通して、生徒Aには、語彙や文法などの基礎・基本を習得するとともに、4技能を統合的に活用しながら、仲間とか関わり合う中で、自己表現する楽しさを味わってほしい。そして、表現活動を通して、知識・技能を身につけることに加えて、表現することへの手応えを

実感し、自信をつけてほしいと願う。

(4) 単元構想図

本研究では、英語学習における代表的な自己表現活動の「自己紹介スピーチ」を核として、年間を通じて、系統的かつ段階的にスピーチ活動に取り組めるように、(資料1)のように独自の単元構想図を作成した。教科書(New Horizon English Course 1)の単元に沿った表現活動にしたことで、教科書の単元の学習で、基礎的・基本的な語彙や文構造を定着させた上で取り組むことができ、より効果的に表現力を育成することができる考えた。

時間	教科書で扱う言語材料との関連	学習課題	スピーチの種類
	学習内容		教師支援と手立て
1 学期 「自己紹介スピーチ」の基礎を学ぶ			
1	Unit 3 一般動詞	英語で七夕を楽しもう	
	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞 want または want to (応用) を用いてほしいものややりたい職業について書く。 英語で短冊に願いごとを書き、笹につるす。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業ではピクチャーカードを用いた文型練習を充実させ、口頭で素早く英作文ができるようにする。また、書くことにも慣れ親しませるため、一文の自己表現作文にも取り組ませる。そのまとめとして「七夕」の短冊作りを実施する。 学年掲示として活用し、学びを共有させる。 	
3	Multi Plus 1 自己紹介	カットアウトピクチャーを使って、「自己紹介スピーチ」をしよう	Prepared
	1時間目 教師の実演と先輩からのメッセージを参考にして、カットアウトピクチャーと原稿を作る。	<ul style="list-style-type: none"> カットアウトピクチャーを使って発表することで、聞き手に分かりやすい発表ができることを、教師の実演と先輩からのメッセージを通して理解させる。 原稿作りについては個別指導を充実させ、何を伝えたいのかについて対話をしながら、よりよい表現を紹介する。 暗唱発表のポイント(発音・声の大きさ・目線・見せ方)を提示し、それに沿ってスピーチをさせる。 	
	2時間目 発表の練習をし、グループで発表する。		
	3時間目 学級全体の前で暗唱発表する。		
2 学期 「自己紹介スピーチ」を応用した「他己紹介スピーチ」を体験し、即興での表現力の基礎を身につける			
2	Multi Plus 1 自己紹介	「自己紹介スピーチ」をよりよいものにしよう	Prepared→ Impromptu
	<ul style="list-style-type: none"> 授業の10分程度(計10回)を利用して、帯活動として、継続的に「自己紹介スピーチ」に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介スピーチのパターンの定着を図り、原稿の暗唱発表から、即興での自己表現(話すこと)への基礎作りとして位置づける。 	

2	<p>Unit 6 三人称単数現在形</p> <p>カットアウトピクチャーを使って、「他己紹介スピーチ」をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ内で、ペアになって自己紹介をし、その後、ペアについてグループの仲間に紹介する。 	<p>Impromptu</p> <ul style="list-style-type: none"> 「暗唱発表のポイント」(1学期と同じ)とともに、三人称単数現在形の正確な運用を意識して「他己紹介スピーチ」に取り組ませる。 付箋を活用し、グループ内で、よかったところや改善点を意識させる。
<p>3学期 「自己紹介スピーチ」・「他己紹介スピーチ」を基盤として、確かな表現力の育成を図る</p>		
3	<p>Unit 10, 11 can, 過去形(一般動詞)</p> <p>「自己紹介・他己紹介スピーチ」のまとめをしよう</p> <p>1時間目 前回の「他己紹介スピーチ」以降に学習した助動詞 can と一般動詞の過去形を活用して、「他己紹介スピーチ」に取り組ませる。</p> <p>2時間目 「他己紹介スピーチ」をもとに、ペアについてのレポート文を40語程度でまとめ、内容理解に関する問題を作る。</p> <p>3時間目 グループになってレポート文の回し読みをし、コメントを書き込む。</p>	<p>Impromptu</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎時間の学習内容とポイントをPowerPointでまとめ、授業中の指示の効率化を図り、その分、ゆとりをもって表現活動に取り組めるようにする。 グループで回し読みをするときには、英語でコメントを書かせ、共感を示したり、次の読み手への問いかけでつないでいったりと、書くことを通したコミュニケーションの楽しさを味わわせる。

●資料1 / 表現活動の単元構想図

3. 研究の実践

〈手立て1〉について

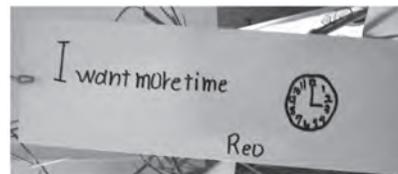
【実践1】「英語で七夕を楽しもう」

「七夕」に合わせて、既習の一般動詞 want を使い、英語で願い事を書かせた。「英語で七夕?!」と意外な表情を見せた生徒もいたが、画用紙で作った短冊を渡し、学年掲示板の前に用意した本物の笹につるすことを説明すると、何を書こうかと真剣に考え始めた。

生徒Aは「『もっと時間がほしい。』と書きたい。」と、教師に尋ねに来た。I want …を使うことを確認し、「もっと」は“more”(未習)という単語を使うとよいことを知らせたところ、どう書けばよいか分かり、満足げに書き始めた。生徒Aは何事にも真面目に取り組めるが、要領をつかむまでに時間がかかってしまうところがある。そんな生徒Aの素直な願いが伝わってくる短冊となった(写真1・2)。



●写真1 / 学年掲示板前の七夕コーナー



●写真2 / 生徒Aの短冊

資料2の生徒Aの感想から、自分の願い（思い）を書く楽しさを味わうとともに、友達の願いを読む楽しさを感じたことがうかがわれた。

英語で七夕を書くのは初めてで、自分の願いが書いておもしろかった。友達の短冊も読んで、おもしろかった。

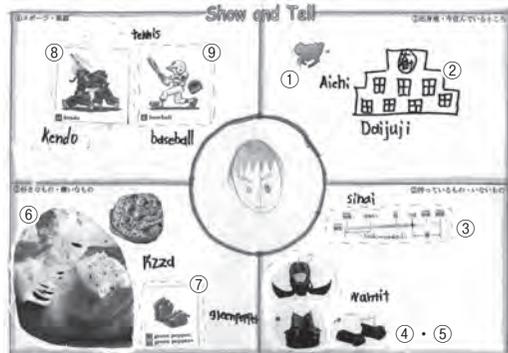
●資料2 / 生徒Aの感想

【実践2】カットアウトピクチャーを使って「自己紹介スピーチ」をしよう

「自己紹介スピーチ」の発表会はよくある活動だが、生徒が本当に言いたいことを表現しようとすると、未習語も使うことになり、発表内容が難しくなってしまうことが多い。

語彙の少ない1年生でも Show and Tell の手法を使い、絵や写真を提示することで、本当に伝えたいことを表現でき、聞き手も理解しやすい自己紹介スピーチができると考え、実践を進めた。

カットアウトピクチャーを作る際には、絵の他に広告やカタログ、コピーなども使ってよいことを知らせた。生徒Aはカットアウトピクチャー（資料3）を作り終えると、原稿（資料4）作りにとりかかった。



●資料3 / 生徒Aのカットアウトピクチャー
 (①～⑨は原稿の番号に対応：①出身地 ②出身小学校 ③もっているもの ④もっていないもの ⑤④の補足 ⑥好きなもの ⑦嫌いなもの ⑧するスポーツ・楽器 ⑨しないスポーツ・楽器)

- ① I'm from Aichi. ② I'm from Daijuji.
- ③ This is my favorite `shinai`. ④ I don't have my `bougū`. ⑤ I really want it. ⑥ I like pizza. ⑦ I don't like green peppers.
- ⑧ I do kendo. ⑨ I don't play baseball.

●資料4 / 生徒Aのスピーチ原稿

生徒Aは原稿作りに時間がかかった。スピーチで具体的に何を紹介しようかと迷っていた。そこで、机間指導の際に「部活のことは？」や「何が好き？」等と生徒Aと対話し、内容を決定した。

生徒Aは原稿を読んで覚える段階で、「みんなの前で発表するのは苦手…」と、不安の声をもらったが、教師の助言と励ましの声かけを受け、何度も練習をする姿が見られ、少しずつ発表に向けて前向きに取り組むようになった。

発表では、緊張した様子ながらも、カットアウトピクチャーを見せながらスピーチをすることができた。生徒A自身は資料5のように、スピーチを振り返った。

自分なりにスラスラ言えて、声も大きかったのはよかったです。

●資料5 / 生徒Aの感想

教師による評価では、「発音」・「声の大きさ」とともに概ね良好であったが、「目線の配り方」・「カットアウトピクチャーの見せ方」が課題として残った。

【実践3】「自己紹介スピーチ」をよりよいものにしよう

「自己紹介スピーチ」を学級での暗唱発表会の1回だけで終わらせてしまわずに、授業の10分程度を利用して、帯活動として継続的に「自己紹介スピーチ」に取り組ませてきた（計10回）。学級発表会での教師による評価を個別に知らせ、自己の課題を把握させた上でスピーチに取り組ませた。生徒Aには「目線の配り方」や「カットアウトピクチャーの見せ方」を意識



●写真3 / 生徒Bを紹介した通信の一部

するように指導した。

最初は、原稿を確認する時間を2分取り、その後、カットアウトピクチャーを見せてグループでスピーチをするという形式で進めた。毎回、メンバーを変え、変化をもたせながら繰り返しスピーチの練習に取り組ませた。5回行ったところで、写真3のように、目線の配り方やカットアウトピクチャーの見せ方が上手にできている生徒Bを英語通信で紹介した。生徒Aはそれを参考に、自分のスピーチに生かすようになっていった。6回目から原稿の確認の時間は設定せずに、すぐに自己紹介スピーチを始めさせた。生徒Aは最初、やや戸惑いを見せたが、カットアウトピクチャーを見て一つずつスピーチをすることができた。この10分間の繰り返しで、自己紹介スピーチの表現とそのパターンが徐々に身につけてきた(資料6)。

何度も自己紹介をして、だいぶできるようになってきた。自分のことを英語で言えるようになってうれしいです。他己紹介スピーチも、この調子で頑張りたい。

●資料6 / 生徒Aの感想

【実践4】 カットアウトピクチャーを使って「他己紹介スピーチ」をしよう

ペアでカットアウトピクチャーを使って自己紹介スピーチをし合い、その情報をもとにメモなしの即興でグループの仲間に伝える「他己紹介スピーチ」に取り組むことにした(資料7)。これまでの積み重ねを生かした「即興スピーチ」

- (1) 二人一組で自己紹介スピーチをする。聞き手はスピーチの内容に関連した質問を一つする。(質問を含めて一人1分程度)
- (2) その後、4人程度のグループで、自分のペアについて1分以内で紹介をする(このときに、ペアのポスターをもって、何のことを言っているのか指し示す)。
- (3) 一人終わるごとに、付箋に簡単なアドバイス(◎よかったところ、↑よくしたいところ)を書く。発表者は自分のスピーチのふりかえりを書く。

◆教師支援◆ 三単現の“- (e) s”をきちんとつけているかどうかを机間指導で把握する。

●資料7 / 「他己紹介スピーチ」の進め方

であり、無理なく取り組めることが利点であった。

資料7の(1)~(3)を3回行い、グループ内で相互評価を行った。付箋を活用することで、発表者は自分のスピーチのよさや課題についてのフィードバックをすぐに受けることができた。特に、「三人称単数現在形」は日本語にはない文法概念であり、基礎・基本の定着を図る授業で文型練習を十分に行う必要があるが、「他己紹介スピーチ」を行う中で、likes にすべきところを like にしてしまった、などの誤りに注意を払わせ、実践的な表現能力を向上させていった。

生徒Aは「自己紹介スピーチ」を通して、グループで発表することにずいぶん慣れてきた。1学期に「自己紹介スピーチ」に取り組んだ時には、原稿を大きな声ですらすらと言えたことで満足していた面もあったが、その後もグループでの「自己紹介スピーチ」を継続してきたことで、徐々に目線やカットアウトピクチャーの見せ方も工夫できるようになり、「他己紹介スピーチ」の時にはずいぶん上達した。にこやかに、グループの仲間にペアの紹介をしている生



●写真4 / 生徒Aの他己紹介スピーチの様子
(2学期)



●写真5 / 生徒Aの他己紹介スピーチの様子
(3学期)

徒Aの姿が見られた(写真4)。

**【実践5】「自己紹介・他己紹介スピーチ」の
まとめをしよう**

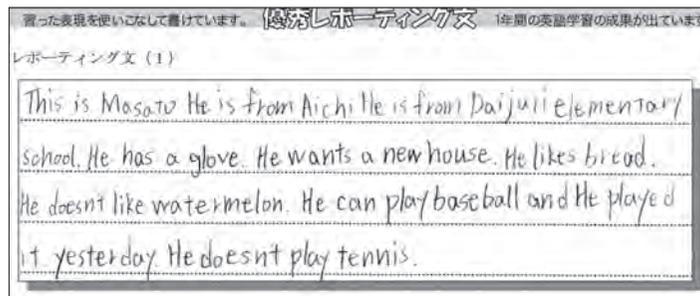
「他己紹介スピーチ」(2学期)以降にも助動詞 can や過去形など、多くの文法事項を学習してきた。これらを活用しながら、再度「自己紹介スピーチ」や「他己紹介スピーチ」に取り組みせるとともに、さらに発展的な活動を加え、4技能を総合的に活用する表現活動を考えた。

資料1の単元構想図のように、1年間のまとめの表現活動を設定した。1時間目の「他己紹介スピーチ」は久しぶりに行ったので、生徒Aはその進め方を思い出すまでうまくできなかったが、数回行くと can や過去形も取り入れてスピーチに取り組むことができた。この時にも、グループの仲間がカットアウトピクチャーを見やすいように工夫したり、聞き手を見ながらスピーチをしたりする等、継続的に指導してきたスピーチの基礎的・基本的な技能が確実に身につけてきていることがうかがわれた(写真5)。

2時間目の英作文(レポーティング文)では、下書きの段階で watermelon や glove といった未習語のつづりを教師に確認する程度で、あとはグループの仲間と相談しながら書くことができた。下書きの後、添削したところ、主語+動詞の文構造は正しく表現できていたが、口頭ではずいぶん意識して使えるようになってきた三人称単数現在形の“s”も、likes の“s”を書き忘れる等の誤りがみられ、書くことの定着にはいっそうの努力が必要であることが明らかになった。

3時間目には、教師の添削を受けて返却された下書き原稿をもとに清書をし、グループで回し読みをした。その際、その内容について英語でコメントを書くようにした。

英作文の清書の中で、特によく書けたものについては、英語通信に掲載し、学年全体に紹介した(資料8)。



●資料8 / 英語通信で生徒Aの英作文を紹介(一部)

〈手立て2〉について

【実践1】「ふりかえりカード」の活用～個の生徒の学びのふりかえりを深めるために～

表現活動では、めざす学びの姿の実現に向けて、本時の授業では何ができるようになったかを生徒自身の言葉で記述させ、それに教師が朱筆を入れることが効果的だと考え、毎回5分程度時間をとって書かせるようにした。

資料9は、3学期の最後の授業の「ふりかえりカード」の記述だが、これまでのグループでのスピーチ活動を通して自信をつけ、表現することに手応えも実感できたことがうかがえる。「ふりかえりカード」への朱筆を通して、生徒Aのふりかえりをより確かなものにし、励ましを与えることができたと考え。

【実践2】「英語通信」の活用～全体で学びの成果を共有し、深めるために～

充実したカットアウトピクチャーや40語程度の英作文の紹介、自己紹介・他己紹介スピーチの活動の様子(写真)や授業日記など、全体で共有することで、読み手の生徒が自らの学習をさらに深めることができる内容は、できる限り数多く「英語通信」に掲載した。生徒Aの英作文を、資料8の英語通信に掲載したところ、照れながらも、嬉しそうな表情で英語通信を読んだ。生徒Aは、英語通信の発行を楽しみにしてくれており、配付すると熱心に読む姿がたびたび見られた。

3学期末に、英語通信について保護者の方から、資料10のような感想をいただいた。

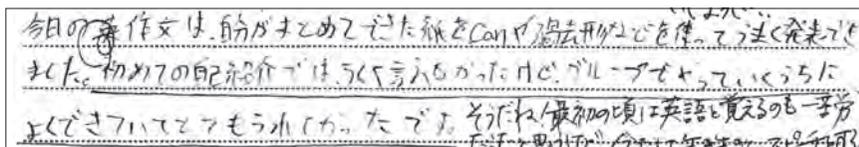
英語通信を通じて、授業で取り組んでいる活動やその成果を紹介できるのは、生徒だけではなく保護者にとっても価値のあるものであることがわかった。

4. 仮説と手立ての考察・検証

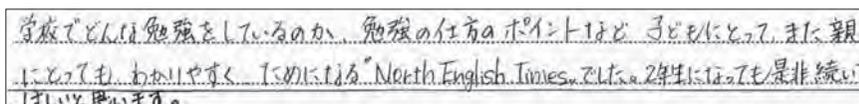
—生徒Aの変容から—

仮説1について、生徒Aの変容(資料2・6・9、写真4・5)から、自己表現し、相互理解を深める楽しさや、表現することへの確かな手応えを実感し、スピーチによる表現能力を向上させることができたと考え。めざす学びの姿を明確にし、表現活動を綿密に計画したことで、「話すこと」については一定の成果を上げることができた。ただし、スピーチを通じて、意識して使えるようになってきた三単現の“s”も、実践5の英作文の下書きから、書くことの定着にはいっそうの努力が必要であることがわかった。1年生の段階で、三単現の“s”を、話すことと書くことの両面から使いこなせるレベルにまで高めるのは難しいのが実情である。今後、生徒が三単現の“s”を意識して正しく表現できるように、継続的に指導していく必要がある。

仮説2について、「ふりかえりカード」の活用を通して生徒への個別指導の充実を図ることができ、次時での指導に生かすことができた。発表活動に対して消極的だった生徒Aは、「ふりかえりカード」を始めた当初、発表活動の後にも、活動の中で新しく学んだ単語を覚えたことへの喜びを書き表すこともあったが、その努



●資料9 / 生徒Aの【実践5】でのふりかえりカード



●資料10 / 保護者の英語通信への感想

力を称賛しつつ、生徒Aの発表についての教師の感想や励ましの朱書きも続けてきたところ、徐々に発表活動についてのふりかえりも書くようになっていき、3学期には、資料9のように、発表活動での自己の成長の喜びも書き記すようになった。教師の朱書きは、生徒一人一人に励ましを与えたり、助言を与えたりと、そのふりかえりの質を高める上で大変効果的であると実感した。生徒の英語学習を側面から支える手立てとして、今後も学習のふりかえりの機会の設定と、それに対する教師の朱書きを大切にしていきたい。

「英語通信」については、個々の生徒の表現活動での学びやよさを全体に広げることで、他の生徒のよさを学ばせることができた。実際に、実践3において、生徒Aは、生徒Bがスピーチをしている様子が紹介された英語通信（写真3）を見て、自分のスピーチに生かそうと練習していった結果、写真4・5のように、自然と目線やカットアウトピクチャーの見せ方にも気をつけて、スピーチができるようになっていった。紹介される側の生徒Bにとっても、自分のよさが認められ、学年全体に紹介されたという点で、プラスにはたらいた。

また、実践5において、よく書けた英作文を紹介した際、生徒Aの英作文も加えたが（資料8）、これにより生徒Aは、まとまった英文を書くことへの意欲を高めることができた。

以上から、「ふりかえりカード」や「英語通信」によって、生徒Aの表現活動に対する意欲は高まったと考えられる。

5. 今後の課題

今後の課題は、「書く力」の育成である。その上で、4技能の総合的な育成を図るために、「書くこと」を基盤として、他の三つの技能（「聞くこと」・「話すこと」・「読むこと」）につなげる表現活動の指導法を研究したい。「書くこと」を基盤とすることで、伝えたい思いや考えを確かなものにするとともに、より適切な表現を身

につけさせることができると考える。その上で、「聞くこと」・「話すこと」・「読むこと」につなげる表現活動を設定すれば、自分の思いや考えを伝え合う楽しさを味わいながら、基礎的・基本的な知識・技能を、より確かに習得させることができるであろう。「書く力」は単発的な表現活動では十分な効果は得られないため、生徒の実態に合わせて、「書くこと」に関する独自の年間指導計画を工夫し、段階的かつ継続的に指導を進めていきたい。

<参考文献>

- (1) 『生徒を変えるコミュニケーション活動 自己表現活動の留意点と進め方』 松本茂編著（教育出版）
- (2) 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 田中武夫・田中知聡著（大修館書店）